

十勝日誌

遠くの山々はかすみ、草木は芽吹き、日に日に雪は解けてひさしから落ちる雪解け水は川に集まり、瀧のように流れています。ここ、石狩の地にも春がやってきました。

私はこれからの十勝の厳しい山越えを想像すると、命が縮む思いでしたが、ここまでの案内をしてくれた虻田のアイヌたちに賃金や帰りの食糧を渡すと、早速、石狩場所の責任者に、十勝方面への案内人を手配するように命じました。

石狩川の川端に出て辺りを眺めてみれば、渡し船は大きな氷の間を行き来し、時には数十メートルはあろうかと思われるそれはもう大きな氷の塊が、雪解け水と一緒にものすごい勢いで押し流されてくるので、見ているだけでも肝が冷える思いです。

ここよりも寒い北の海では、大きなクジラが河口近くの雪解けの氷に打たれて死ぬことがあると

聞いたことがあります、この様子を見てみると、まんざら嘘でもない気がしてきます。

この川を小さな舟で上るなんてことは、とても不安なため、陸に行くことに決め、箱館奉行所の石狩詰調査役、飯田豊之助にも同行を勧めました。

安政5年（1858年）2月19日

快晴。石狩場所の支配人らが、旅の同行者として、旭川周辺のアイヌを連れてきました。小使のイソラムをはじめ、ノンク、サダ、ヤアラクル、アイコヤン、イナヲエサン、タカラコレ、イコリキナ、サケコヤンケらで、ふんどしや



石狩川河口 当別付近

石狩川は北海道で最も長く、人や物資を運ぶ道として使われた。